

archive
vol.38

A-Lab Exhibition Vol.36

はしもとみお木彫展
いきものたちとの暮らし



A-Lab archive

A-LAB archive vol.38

はしもとみお木彫展
いきものたちとの暮らし

目次

■ 出展作品	1
■ プロフィール	20
■ アーティスト・インタビュー	21
■ フライヤー	27







ROOM1では、尼崎市の武庫元町にある「西武庫公園」の様子を再現しました。信号機や道路標識などが並び、遊びながら交通ルールを学ぶことができます。「交通公園」として親しまれる公園です。はしもとみおさんが浪人生活を送っていた頃、風景を描く課題で尼崎で一番好きな風景としてこの公園のスズカケノキを描いたりしたそうです。





あまがさきでくらすいきもの掲示版













彫刻家

はしもとみお | Mio Hashimoto

1980年 兵庫県生まれ。幼少期～10代を尼崎で過ごす。
 2005年 東京造形大学美術学科彫刻専攻領域卒業。
 2007年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻彫刻領域修了。
 2010年 アラブ首長国連邦滞在制作。

動物たちのそのままの姿形を木彫りにする彫刻家。各地の美術館で、木彫りの動物たちに間近で触れ合える展覧会を開催するほか、動物たちの肖像制作、フィギュアやオブジェの原型制作や動物たちのイラスト等も手がける。

主な展覧会

- 2020 「はしもとみお彫刻展 猫たちの物語」 書肆・吾輩堂（福岡）
 「はしもとみお彫刻展 ～かたちの向こうにあるもの～」 GINZA TANAKA 心齋橋店（大阪）
 「にいみどうぶつ列車へようこそ! 木彫り動物の世界」 新見美術館（岡山）
 「はしもとみお彫刻展 海からはまるいきものたち」 蘭島閣美術館（広島）
- 2021 「木彫りの贈り物展」 kokoti café（愛知）
 「はしもとみお 世界にひとつの木彫り展」 巢葉（富山）
 「はしもとみお どうぶつ彫刻展 美術館でアートキャンプ!」 ふくやま美術館（広島）
 「LIFE はしもとみお彫刻展」 PARCO MUSEUM TOKYO（東京）
 「はしもとみお 動物彫刻展」 石川県政記念いのき迎賓館（石川）
 「はしもとみお木彫展 いきものたちの交差点」 武蔵野市立吉祥寺美術館（東京）
 「はしもとみお展 「NAOTの靴とどうぶつたち」」 NAOT AICHI（愛知）
 「はしもとみおの木彫りくらしといきもの展」 日本モンゴル民族博物館（兵庫）
- 2022 「木彫展 はしもとみお深いミドリの世界」 garage NAGOYA（愛知）
 「はしもとみお展 いきものたちの言葉」 平田本陣記念館（島根）
 「はしもとみお木彫展 カタチの生まれるところ」 防府市地域交流センター（山口）/ はつかいち美術ギャラリー（広島）/ 姫路市書写の里・美術工芸館（兵庫）巡回 他多数

Q. 自己紹介

はしもとみおです。彫刻家をしています。出身は父と母が兵庫県の豊岡市の出身だったので、豊岡で生まれました。その後父の仕事の関係で神戸市に住み、その後家族が家を買ったのが尼崎でした。なので私は4歳ぐらいから20歳ぐらいまでは尼崎に住んでいました。

Q. 幼少期はどんな子どもでしたか？

動物とだけは会話ができる。人が本当に苦手なんですよ、小さい頃から。お母さんごっことか、よく女の子がやるような遊びでも「犬役をやらせてほしい。」と言っていました。人の役ができないような内気な子供でした。でも動物の飼育係はやっていたので、やっぱりその頃から動物とだけは心が通じ合えるというのがずっとあったんだと思いますね。

Q. 動物を好きになったきっかけはありますか？

多分ないんですよ。もう本質的な部分というか。人と関わるのが苦手というもあるし、いきものたちとだけたらずごく気持ちが楽に触れ合えたというのがあって、多分生まれつきそういう性分なんだと思います。

Q. よく遊んだ場所や思い出の場所は？

尼崎は今でもそうですけど、便利な街なんですよ。公園も家から50mぐらいのところがありましたし、そこにはクスノキとかもあったので木に登ったりとかね。砂団子を作ったりとか。普通の子どもの遊びをしていました。当時は野良猫とか外犬が多かったので、お家では小さい頃は飼ってなかったので、外犬に毎日挨拶したりとか、野良猫にちょっとご飯をあげたりとか。そういうのが本当に幸せな時間でしたね。

Q. 動物は飼っていましたか？

小学校の時に一度犬を飼っていたんですけど、病気で早くに亡くなってしまって。それもあって獣医になろうとそのときに決意したんですね。あとは震災後に猫を保護して飼ってました。

Q. 獣医から彫刻家を目指すきっかけは？

獣医を目指すのはすごく自然で、とにかく「動物に関わる仕事がしたい」と。私は一生を動物と過ごせたらそれでいいかなぐらいに思っていたので獣医を目指してました。15歳の時ですかね、進学も理数系に決めていたのですが、阪神淡路大震災という大きな震災



に遭った時に「命というのはある日突然、それも大量に失われることがある。」と。その無力感というか。医学というのは生者に対するの仕事であると感じ、私はその阪神淡路大震災というものを経験した者として生きていく上で、死者に対する仕事がしたい。この世界からいなくなってしまったものたちをもっと思い出したり、もう一度触れたり。そのためにそういう体験が与えられたのかな？とすごくガツンと胸にくるものがあった。それでその頃から自然と目の前にいる動物たちの絵を描くようになったんですよ。避難所でもやっていたんですが、何十時間、絵を描いていても飽きないんです。そのときに「これは天職かも知れない。」と。そこからガラッと進路を変えて美術の道に足を踏み入れました。

Q. 音楽（ヴァイオリン）について。

ヴァイオリンは4歳ぐらいから。兄がやっていたので兄の真似をして始めたんですけど。兄はヴァイオリンが大嫌い。でも今はミュージシャンなんですけどね。兄はジャズドラマーの道に行っただけですが、私はヴァイオリンが大好きで兄より長く続けていました。ジュニアフィルハーモニーに入っらずとオーケストラをやったりとか、週に1回ヴァイオリンの先生に教えてもらっていました。だから音楽は私の中では人生全部です。100年人生だとしたら、人生全部を共にする友達のような感覚ですね。それが本職になってもなくても気にならないぐらい好きなものなんですよ。コロナ禍になってからですが、もともとミュージシャンの友達

が兄の関係もあって多かったのですが、「ヴァイオリン弾いてみない？」と誘ってもらって、弾いたら20年ブランクあるのに音楽は私を見捨てていなかったんですよ。すごく気持ちよく弾けたんです。その時に本当に音楽というのは長い友達なんだなというのを感じましたね。

Q. 彫刻を専攻することについて

そこに迷いはなかったですね。というのもやっぱり物質が失われるということに対する抵抗というか「もう一度触りたい。」という想いで美術を始めているので、やっぱり絵だけでは自分が納得いかない部分があるので、立体というのはすごく自然な流れでしたね。

Q. 一番最初に制作した作品は？

一番最初は猫のトムくんという私が尼崎の実家で保護して飼っていた猫ですね。母親が教師をしていたのですが、授業にちょっとやんちゃな生徒が猫を連れてきた。学校に猫を連れてきては困るとなり、「もう家で飼うわ。」と、家に猫がきます。その子がトムくん、私の最愛の猫です。その子と長い間一緒に暮らしていました。でも大学が東京だったので、進学で離れることになって「トムくんが側に居てくれたら何て幸せなんだろう…」と。思って、掘ることにしたんです。それが人生最初の木彫であり、人生最初の動物の彫刻との出会いです。



Q. 最初の木彫制作はどうでしたか？

覚えていないことに愕然としたというか。8年とか長い間一緒に居たのに、鼻のポッチがどっちにあったのかさえ再現できなかつたんです。今はこういう仕事なので、3Dで覚えられるようにはなりましたが。人ってぼんやり一緒に暮らしている上では、それほど対象をしっかり見ていないということをそのときにすごく感じたんですよ。だからその子の模様がどこからどこにあったかとか、写真を見ないと全然再現できないというのがすごい衝撃でしたね。「私は何を普段見ていたのだろう?」と思いました。でもそのときにすごく大事に思ったのが「手触り」の部分。それだけは体験として残っているので。視覚じゃなくて。忘れないんですよ。その子の性格とか。だからその辺りを思い出しながら作った感じでしたね。

Q. 大学時代の思い出は？

いっぱいありますね。友達と音楽をしたりもしましたし。犬を飼い始めましたね。初代月くんです。大学2年生の冬でしたかね。木を買いに行くつもりが犬を買って帰ったという。それもすごく私の衝動的な性格が出ているんですけど。いやー、犬買っちゃった。どうしようかなと先生に相談したら「モデルとしてなら連れてきてもいいんじゃない?」となって。なんと大学と一緒に通うという。漫画のような大学生活を送っていました。初代月くんをお友達もすごく可愛がってくれて、一緒に過ごした大学生活が今の私の原点ですね。あとは大学に猫がたくさんいたので、その猫たちのスケッチを朝5時からやっていました。授業が始まるまで3、4時間毎日やっていたんですけど、それが苦じゃなくて。「私は本当に作るのが好きなんだな。」と大学生のときに感じました。

Q. 制作のモデルになる動物について

ご依頼を受けて作る場合は、全く知らなかった子と出会うことになります。ご依頼がない場合は私が展覧会とかで全国を旅したり、世界を旅したりすることがあって、そのときに出会った子達をアトリエで再現しています。

Q. 動物園に行くこともありますか？

そうですね。動物園の子の場合も多いです。でもあまり積極的に自分から動物園に行くというより、今は動物園の子たちのフィギュアを作る仕事をしているので、それで動物園に取材に行くことがあります。その最中に会った子たちというのが本当に心奪われる子たちがたくさんいて。その子たちをフィギュアだけじゃなくて原寸大でということは近年は増えましたね。

Q. 制作に使っている木はどんな木ですか？

クスノキという木を使っています。これは思い入れがあって、尼崎の交通公園だったり、私の行っていた中公園という公園だったり、今の自宅の庭にも実はクスノキがあります。日本によくある木なんですよ。このクスノキが私にとっては相棒というか、すごく彫り心地が良いのでこれしか使っていないですね。

Q. 彫る前にスケッチをするのはどうしてですか？

その子の写真を撮るだけではなく私の中でその子を掴めない部分があって。写真を撮るときは、ただ眺めて見ているんですよ。ただ絵を描くときというのは形を積極的に知ろうとしながら見ているので、自分の制作の設計図のように繋がりがやすいです。なのでスケッチを大事にしています。

Q. 制作で大事にしていることはありますか？

シンプルに「生命感」というものを最も重要視する制作をしています。「生命感」さえあれば、正確さとか正しさ、技術的な部分はなくてもいいものだと思っていますね。その彫刻が生きていればそれでいい。逆に言うと、すごく高い技術で精巧に作られて美術品としての



価値は高くても、生命感がないなら私にとってはそこに価値はないんですよ。そのぐらい重きを置いている部分ではあります。

Q. シェアアトリエ (rabbit hall) について

すごい面白い仲間で、靴屋さんとミュージシャンと私で始めたんです。全然ジャンルが違うので、混ぜり合っってすごく面白い雑談空間になっていて。そこに居るとアイディアがすごく沸くんですよ。アトリエも大好きですけど、アトリエにいると自分の枠組みの中ですごく考えるので「こういうことができる」「ああいうことができる」というのが彫刻の中での発想になるんです。けど靴屋さんとかと話していると「そういう服できたら面白そう」とか。アパレル関係なので、全然また発想が違うんですよ。ミュージシャンと話していると「じゃあその彫刻たちの展覧会に音をつけよう」という話になってライブをしたりとか。コロナ禍になって世界が閉塞したと思っていましたが、すごくフレキシブルに世界が広がっていく空間です。東京のアトリエはすごく貴重な場所になっています。

Q. 今後の展望について

今後の展開はまだ私もぼんやりしているんですけど、どこかでいずれは美術館を作りたいなと思っています。美術館兼音楽ホール。rabbit hallの進化系ですね。展覧会場内でライブができるというのはすごいなと思ったんですよ。音響設備も整っていて。そこに私の好きなもの集めたいなと思っています。本屋さん、雑貨屋さん、カフェ、宿泊施設みたいな。トータルで楽しみたい。そういう場所が作れたらすごくいいだろうなと思って、今ぼんやりそのことを人生最後の目標のように最近は考えていますね。

Q. 挑戦したいことはありますか？

総合芸術的なもの。自分が五感を使って、すごくクリエイティブな気持ちが生まれたり、人に優しくしようと思えたりとか。音楽とか美術はそういうもののためにあると思うので、何かそういう空間自体をこちらが提供できたら、日本の若い人たちとか、私たちがみたいのちょっと歳をとってきた人たちでも、もう1回街とか国を好きになれるのではないかなと思っています。

Q. 1日の流れ (ルーティーン) は？

月くんと長い散歩に行きます、40分とか歩きます。その長い散歩は無音で音楽も聴かず、ただ歩く。思考もほぼ停止して歩くんです。その後に絵を描きます。スケッチ、月くんの絵が多いですね。朝1枚絵を描いて、それが終わったら大体スタッフさんが来たりとか。来ない日でも9時30分ぐらいには仕事に入りますね。仕事内容は日によって違って、展覧会のための制作だったり、フィギュアの制作だったり、オーダーメイドだったり。本当に毎日仕事が1個1個変化するので、飽きることがないというか、すごく楽しい時間を過ごしているとすぐ17時になりますかね。そこからは食事をしたり、お風呂に入ったりしたらあとはヴァイオリンをずっと弾いています。そして本を読んで寝る。何も無駄なことをしない生活という感じですね。

Q. 休日の過ごし方は？

休日がありませんから分からないですけど、自分が好きなことは本屋さんに行くことが1番好きかもしれないですね。本が好きなので、本屋さんを探しては行ったりとか。あとは雑貨屋さん、マルシェも好きですし、服屋さんも好きです。そういう別のカルチャーに触れるのが自分の癒しになっています。



Q. 好きな食べ物は？

チョコレートですね。さっきも隠したんですけど、テーブルの中チョコレートだらけです。

Q. 好きな場所は？

好きな場所は、アトリエですかね？ここと、rabbit hallですね。あとは全国の本屋さんですね。

Q. 尼崎にはよく帰って来ますか？

ほとんど帰らないのですが、実家の近所に好きな服屋さんがあってそれはたまに行ったりしますね。あとはほとんど帰らなくなっちゃいましたので、この機会に尼崎をうろろろできるのがすごい楽しみです。

Q. 尼崎について

私は阪急沿線に住んでいたのですが、武庫川の河川敷のイメージとか、武庫之荘とかのイメージしかないんです。でも南の方もやっぱり好きで。癖の強い商店街とか。今なら大人なので、小さい頃みたいに怖がらずに楽しめると思うので、ちょっと行ってみたいですね。

Q. 交通公園の思い出はありますか？

1 番の思い出は実は小さい頃ではなくて、18 歳のときなんですよ。私は浪人生活を尼崎で送ってました。そのときに風景を描く課題があったんです。1 番好きな風景は尼崎だと交通公園だなと思って、交通公園にキャンバスを持って行って、そこで描いたのがスズカケノキというプラタナスという実のなる木だったんで



す。交通公園でぼんやり絵を描いていると、すごい幼少期のことが思い出されて。人とあんなに喋るのが苦手と動物としか関われなかった人間が、コミュニケーションというものを最も大切にしないといけない美術というジャンルに足を踏み入れようとしている。その不思議な経過が面白くて。だから 1 番印象にあるのがその交通公園で 3 日間ぐらいい朝から晩まで絵を描いたことなんですよ。

Q. みなさんへメッセージ

固く考えず動物たちに会いに来る感覚で来て欲しいですね。そこには美術というジャンルを遥かに超えた、気楽な楽しみがあると思うので、動物嫌いな方にも 1 度来て欲しいですね。木彫りなのでアレルギーも起きませんし。彫刻なら犬アレルギーの子どもたちでも触れることができるんですよ。だから生まれて初めて触ったという子もいて。それもすごい感動するので。是非、動物が苦手という人ほど来てもらおうと、純粋に存在の美しさとか可愛さを体験していただけたらと思います。

*このインタビューは 2022 年 12 月上旬に行われたものです。

・インタビュー映像



・「はしもとみおの知らん尼崎歩く」

2022 年 12 月下旬に、写真家井上武史と小林哲朗氏と一緒に、はしもとみおが「知らん尼崎」を歩きました。新たな尼崎の魅力を発見するきっかけになれば幸いです。



A-LAB Exhibition
Vol.36

はしもとみお木彫展

いきものたちとの暮らし



A LAB 2023 1 / 4 水 ~ 1 / 29 日

平日 11:00~19:00
土日祝 10:00~18:00 火曜日休館
入場無料

A-LAB archive vol.38
Exhibition Vol.36 「はしもとみお木彫展 いきものたちとの暮らし」
2023 (令和5) 年 3 月 初版第1 刷発行

フライヤーデザイン 北川正
写真 小林哲明
発行 編集 制作 尼崎市 文化振興課

A
LAB

お問合せ先

尼崎市 文化振興課

TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)

FAX : 06-6489-6702

E-mail : amalove.a.lab@gmail.com